

【関連イベント】

平成22年1月16日(土) 19:00～

○芭蕉の糸が未来をつむぐ ～芭蕉布再生の道～

○地球交響曲第5番石垣昭子編上映&トーク&八重山・奄美島唄ライブ

会場： ばしゃ山村 レストラン「AMA ネシア」 TEL0997-63-1178

入場料： 前売り 2,000円 | 当日 2,500円 (小学生以下無料)

主催・問合せ アマミアートプロジェクト 090-9595-5823

平成22年1月17日(日) 14:00～

○シンポジウム：『現代に生きる伝統技術の再生～奄美芭蕉布再生に向けて』

会場：奄美パークイベント広場 入場無料

○基調講演：

弓削政己『奄美諸島の織物の歴史—芭蕉布と大島紬—』

石垣昭子『西表島における染めと織の再生』

○パネルディスカッション：パネリスト 石垣昭子 | 内山初美 | 田町まさよ 他

平成22年1月31日(日) 10:00～16:00

○芭蕉体験ワークショップ：『口割(くちわい)、芋炊き(うーだき)、芋挽き(うーびき)』
～倒した糸芭蕉の皮を剥ぎ、釜で煮て繊維を取り出し、糸を挽く作業～

会場： 田中一村記念美術館 園庭

参加費： 2,000円(材料費込) ※弁当持参

申込み・問合せ あまみーる 0997-57-0210

(参考) 過去に開催したワークショップ

第1回 10月18日(日)

内容 芭蕉布の説明、芋挽き(うーびき)、芋績み(うーうみ)

*芭蕉の皮をはぎ煮たものから、繊維を取り出し糸にしていく作業

第2回 11月1日(日)

内容 糸芭蕉を倒し、皮を剥ぎ、釜で煮て繊維を取り出す。

第3回 11月29日(日)

内容 芭蕉糸を使って、織り体験。

○奄美芭蕉布再生プロジェクト
実行委員会メンバー

会長

宮崎 緑

(奄美パーク園長)

委員長

内山 初美

(紬研究者、ののさばくり会会長)

委員

伊勢 勝義

(大島紬製造業)

委員

金井 志人

(若手泥染め作家)

委員

高美 喜男

(奄美大島エコツアーガイド連絡協議会会長)

委員

中山 清美

(奄美博物館館長)

監事

前村 卓巨

(田中一村記念美術館)

事務局長

田町まさよ

(アマミアートプロジェクト代表)

平成21年度かごしま文化芸術活性化事業(鹿児島県)

『神への祈りと島のリズム』

石垣昭子作品展

同時開催：『奄美の‘古芭蕉布’の展示と再生プロジェクトの道のり』

会期：平成22年1月17日(日)～2月7日(日)

会場：奄美パーク 田中一村記念美術館 企画展示室

〒894-0504 鹿児島県奄美市笠利町節田 1834

TEL0997-55-2635 FAX0997-55-2613

<http://www.amamipark.com/>

開館時間：9:00～18:00(入館は17:30まで)

休館日：1月20日(水) | 2月3日(水)

観覧料：無料

主催： 奄美芭蕉布再生プロジェクト実行委員会

協賛： (株)ばしゃ山 財団法人奄美文化財団

後援： 奄美市 | 龍郷町 | 瀬戸内町 | 宇検村 | 大和村 | 環境省那覇自然環境事務所 | 奄美群島広域事務組合

大島地区文化協会連絡協議会 | (株)南海日日新聞社 | (株)奄美新聞社 | 奄美テレビ放送(株) | 南日本新聞社

(株)鹿児島放送 | NPO法人ディあまみエフエム | 本場奄美大島紬協同組合

写真提供：茂木綾子・石井仁士 協力：ぬぬぬバナバナ

“奄美芭蕉布再生プロジェクト”

奄美の芭蕉布、糸は、薩摩藩時代には藩への貢納品のひとつであり、それらは薩摩藩と琉球王朝の交易品として使われていました。また芭蕉布は、仕事着、普段着からノロの衣装や礼服まで幅広く着用され、芭蕉の山は花嫁の持参金になるほど価値のあるものでした。しかしながら、現在は、一部の作家が個人的生産を行っているだけであり、貴重な伝統技術産業が途絶えつつあります。

島の宝であった芭蕉布の伝統を再生させようと、この度、“奄美芭蕉布再生プロジェクト実行委員会”（宮崎緑会長）を組織し、沖縄・奄美群島における芭蕉布の調査を行い芭蕉布の系譜を辿ると共に、今でも豊富にある‘芭蕉’を使い、芭蕉糸の集荷から布の生産までの技術取得の講習会（ワークショップ）を開催し、伝統技術の再生に取り組むこととなりました。これまでに計 3 回のワークショップを開催。奄美大島各地より多数の方々にご参加いただき、関心の高さを感じました。

そしてこの度田中一村記念美術館において、芭蕉糸と絹、麻、綿などの糸を交ぜて織られた布、‘芭蕉交布’を使っでの創作活動を行い事業としても成功されている、西表島在住の石垣昭子氏の作品展・シンポジウムを開催し、奄美芭蕉布の将来への可能性を探ります。

彼女は、私たちに先駆けて約 30 年かけて、西表島でほぼ途絶えかけていた芭蕉布、染めの伝統技術を現代の感覚に合う形で見事に再生させました。さらに、単なる技術の再生にとどまらず、自然を利用し、自然に手を加えながらも、それらと美しく調和してきた島の生き方そのものを再生させていったのです。その彼女のやり方から生まれる美しい作品と生き方は、国内外で高い評価を受けています。

彼女の作品展と同時に、奄美各地に残る古芭蕉布の展示と奄美在住の作家たちによる奄美の芭蕉を使った作品の展示を行います。

木を切り倒すところから布に織り上げるまでいくつもの行程がすべて手仕事で行われる芭蕉布、金色に輝く芭蕉の糸から生まれる作品の魅力をぜひじっくりご覧ください。

奄美芭蕉布再生プロジェクト実行委員会



プロジェクトへのメッセージ

初めてバシャ山に出会った時、私は絶句した。

その時以来、緑葉をたたえたバシャ山は手招きしているかのように私の脳裏に焼き付いてしまった。自分に何が出来る訳でもないが、時の流れに乗って奄美が近づいて再度の出会いとなった。

あこがれの田中一村の光と風の当たる空間に芭蕉布を展示するプロジェクトが可能になった事は夢のようであり、この意義は言葉に尽くせません。芭蕉布は古くから奄美と琉球と繋がっていたし、その心も繋がっていたであろう。

このプロジェクトを機に、これまで眠っていた奄美の芭蕉に光が当たり動き出し再生の道が開けて行く事を心から希っている。

2010 年の初めに 石垣昭子



奄美大島

○紅露工房のこと

島で紅露（くーる）と呼ばれる植物は、沖縄では石垣島と西表島にのみ自生する特異な染料植物で、琉球王国以来古くから染料として使われている代表的植物。山地にのみ根を張り育つ巨大なイモは堅牢な色素を持つ。この優れた植物に学ぶ仕事をめざし「紅露工房」と命名した。

良い仕事をするにはまずはより良い環境ありき。山川海のこの優れた生態系を保つ環境の中で芸術作品をめざすのではなく、島で生きる「モノづくり」を、そこにあって光が当たらず見失われていた「モノ」に光を当て磨いて行く事が出来たら……。暮らしの中から手仕事が始まり、手仕事は自然から多くを学んで来た。糸芭蕉、皮芭蕉、苧麻、絹などの天然繊維、藍、紅露、紅樹、福木、梶子、山桃、八重山青木、椎、赤芽がしわなどの染料植物、それら天然素材の恵みにより多様な布づくりの実践、研究開発が進められてきた。

一環した布づくりをコンセプトに、季節によるワークショップ、研修生の受け入れ、後継者育成など、モノの溢れた今日、手仕事を手のスピードで自らが楽しく持続可能な、よいモノづくりを提案し続けている。

紅露工房展、真南風展、各種企画展、島人文化祭など、日本の南に位置しながら東南アジアと繋がる織物文化を意識して活動を試みている。

○石垣昭子プロフィール

2010 年寅年古稀を迎えます。

子供の頃、竹富島の女達はみんな機を織っていた。祖母は芭蕉布づくりの名人だったから糸を紡ぐ日常で育った。東京の美大へ進み、美しいものを見る感性が芽吹いた。植物染料の深く豊かな世界を創作している京都在絢作家の志村ふくみに師事、その人間性と仕事の有様に大きな影響を受ける。

更に沖縄の豊かさを意識した時代に日本民藝館に学び、柳悦孝、大城志津子との出会い、更に三宅一生との出会いに日常的な衣の美しさに衝撃を受ける。その延長線にてファッションデザイナーの真砂三千代、テキスタイルの真木千秋と三人三様のコラボレーションで布づくりの楽しさを発見、「真南風：まーぱい」ブランドを立ち上げる。

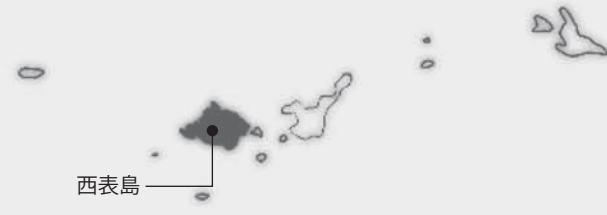
ライフワークとなった祭事行事衣装の製作と八重山芸能衣装の伝統と現代、日常と非日常の世界を往復しながらトータルな布の世界にのめり込む。

2005 年映画「地球交響曲第五番」、2008 年ドキュメンタリー映画「島の色 静かな声」に夫と共に出演、島の生活史の記録として発信する。

現在、紅露工房代表、西表島エコツーリズム協会会長を務める。

紅露工房スタッフ

石垣昭子・石垣金星 望月サラン・崎原章子・前津雪絵



西表島

沖縄本島